

阿部万里江先生

「現代のちんどん屋——音楽ではない音の美学」

東谷 護 愛知県立芸術大学音楽学部教授（音楽学）

1.

2018年度音楽学コースの特別講座は、阿部万里江先生（ボストン大学音楽学部准教授）をお招きした。題目は「現代のちんどん屋—音楽ではない音の美学—」で、2018年12月13日（木）の10:30～12:00に愛知県立芸術大学新講義棟にて開催された。

阿部万里江先生は、カリフォルニア大学バークレー校で民族音楽学の修士号と博士号を取得された。その後、ハーバード大学ライシャワー日本研究所のポスドク研究員、ハーバード大学の人類学部音楽科の客員助教授を経て、現在、ボストン大学音楽学部の准教授として民族音楽学の研究と教育に携わっている。2018年度は、国際日本文化研究センター客員研究員として来日されていた。

研究テーマとして、日常生活から社会運動までの幅広い文脈のなかにも音と空間の政治を掲げ、音楽と考えられていない日常的な音を通じて人々が物理的、社会的空間についてどのような立ち位置にいるかを再構築することに力を注いでいる。主著に、現代日本のちんどん屋を研究対象とした、*Resonances of Chindon-ya: Sounding Space and Sociality in Contemporary Japan*, Middletown, CT: Wesleyan University Press, 2018. がある。

2.

講演は、以下の3つのトピックを軸に進んだ。

- ① 音楽人類学／サウンドスタディーズ — どうしてこの道に進んだのか —
- ② ちんどん屋の響き — 研究紹介 —
- ③ 問題提起

高校時代にタンザニアにボランティアに行ったときの異文化コミュニケーションの体験が、Ethnomusicology（音楽民族学／民族音楽学／音楽人類学）

に進まれる契機だったというエピソードから幕は上がった。阿部先生は、それまで音楽のスタートはヤマハの教室からという日本の音楽関係者によくあるエピソードと同じであり、大学進学も音楽学部で西洋古典音楽の道に進む準備をしていたということだったので、タンザニアでの出来事は阿部先生の人生のなかでも衝撃的なものだったのだろう。クリストファー・スモールが提唱した Musicking という概念を紹介しながら、音楽への見方、サウンドスタディーズについて言及された。続けて、今回の講演のハイライトである、阿部先生が10年余りに亘って、日本でちんどん屋を参与観察したなかの一部を紹介しつつ、ちんどん屋について話を進められた。

ちんどん屋は、「広目屋（広告業）＋ジンタ」という歴史的経緯があり、テレビが普及し終えたといってもいい1980年代後半には、それ以前よりは街で見かけることは少なくなってしまった。またちんどん屋が本来的には広告宣伝をすることが主たる仕事であったのに、ちんどん屋のパフォーマンス、衣装、音に注目し、アートとしての側面に特化して新たにちんどん屋を始めた者たちもいたが、阿部先生がフィールドワークをしたのは、昔ながらの広告業としてのちんどん屋である。広告宣伝を主目的としながらも、いかに地元の人に受け入れられるようにしているか、あるいはちんどん屋が街や商店街を練り歩くときの、音の出し方にも工夫が施されていることを言及された。たとえば、天気によって音の質感が変化したり、楽器の向け方による余韻をどう残すかまで考えて演奏したり、練り歩く時に視線を広くもっていたり、と見られる対象となっていることも強く意識していることを指摘された。

3.

このような地道な研究から、阿部先生は「音の想像共感」という考えを導き出した。とりわけ「響き」について多様なあり方から検討されたことを紹介した。今回の特別講座では、主に現代のちんどん屋に焦点をあてつつ、音楽学の学生、大学院生を意識した阿部先生の学問的背景の紹介も講演のなかに取り入れていただき、「教育的側面＋最新の研究成果」の講演という聞き手にとって、非常に贅沢な内容であった。